

硫黄列島にはシマイズセンリョウの他、フヨウやノボタンの類など、小笠原諸島や太平洋諸島のものとは関係なく、琉球に関する植物が見られることは興味深い。

*Maesa montana* A. DC. var. *formosana* (Mez) Yamazaki, stat. nov.

*Maesa formosana* Mez in Pflanzensreich 9, IV-236: 29 (1902).

*Maesa tenera* Mez sensu Walker in Philip. J. Sci. 73: 34 (1940), p. p.

*Maesa augustinii* auct. non Nakai: Tuyama in Bot. Mag. Tokyo 52: 467 (1938), excl. type specimen of Nakai.

Distr. Taiwan, Ryukyu, S. Kyushu and Minami-Iwojima in Sulpher Islands.

The type specimen of *Maesa augustinii* (Nakai) Tuyama was collected from a cultivated stock in Chichijima Forestry Experimental Station, which has been believed to send back from Minami-Iwojima (St. Augustine) island in the Sulpher Group of islands. It becomes clear that the specimen is identical with *M. montana* A. DC. var. *montana*. However, the variety has been not found from Minami-Iwojima.

It is thought a strong evidence that the type specimen did not collect from any Minami-Iwojima-originated-stock in the Experimental Station.

(東京大学理学部附属植物園)

## 日本に帰化しているナガボソウ属植物の学名 (山崎 敬)

Takasi YAMAZAKI: Scientific Name for *Stachytarpheta* Naturalized in Japan

ナガボソウは1888年(明治21年)に *Stachytarpheta prismatica* Vahl の名で小石川植物園で栽培された標本が残されている。松村任三氏の Index Plant. Japon. 2: 533 (1912) にこれが記録された。此の頃ナガボソウ(長穂草)またはモクマベン(木馬鞭)の名がつけられた。この植物は後に中井猛之進氏によって *S. dicotoma* (Ruiz. et Pav.) Vahl と同定され、松村氏の改定日本植物名彙 2: 386 (1916) にはこの学名で載せられている。東大の標本には異名として *S. urticaefolia* (Salisb.) Sims が引用されている。当時では両者は同一種と見なされていたので、ほぼ正しい名であった。これと同じものが小笠原の父島に古くから帰化している。東大にある一番古い標本は1920年(大正9年)なので、明治末か大正の初め頃、観賞用として持ち込まれたものが逸出したのであろう。戦後新来の帰化植物に押されて山地に入っているが、旺盛な繁殖をしている。これにはナガボソウの和名が当てられ、学名は *S. dicotoma* Vahl を使っていた。その後どうい理由か不明だが、学名は *S. jamaicensis* (L.) Vahl に改悪

され、それが長年通用していた。

戦後、沖縄に多数の植物が帰化したが、この中に2種類のナガボソウ属のものがある。初島住彦氏(琉球植物誌, 1971)はこのひとつをナガボソウとし学名に *S. cayennensis* Vahl を当て、もうひとつにフトボナガボソウと新名をつけ学名は *S. jamaicensis* (L.) Vahl とした。したがって小笠原のナガボソウは和名と学名とが分離して別々のものに当てられたことになる。調べてみると *S. jamaicensis* はフトボナガボソウに当てるのが正しいことがわかった。初島氏の処置が正しいので、長年ナガボソウにこの学名を使用していたのは誤りであった。Walker (Fl. Okinawa, 1976) は Moldenke の協力のもとにナガボソウの学名に *S. urticaefolia* (Salisb.) Sims を使用した。ナガボソウはこの100年の間に *S. prismatica* から始まって、*S. urticaefolia* まで5つもの学名の変更があったわけである。この学名は最近の琉球植物誌に使われ始めたが、まだ一般にはよく知られていない。

最近ジャワを旅行した際、この類を見る機会が

あった。多くはフトボナガボソウであったが、それに混じって花が白く薄く紫色を帯びた別の種類があった。調べてみるとこれが *S. cayennensis* (L. C. Rich.) Vahl に該当することがわかったが、小笠原のものとは明らかに別の種類である。ナガボソウ属は南アメリカ原産で多くの種類があり、アジアや太平洋諸島には幾つかの種類が野生化しているが、帰化植物のため学名の決定はかなり難しい。H. N. and A. L. Moldenke (Dassanayake et Fosberg ed., Fl. Ceylon 4: 246–267, 1983) が長年の蓄積をもとにして、セイロンに帰化しているこの類の詳細な報告をしている。それに拠るとナガボソウは *S. urticifolia* (Salisb.) Sims とするのが正しいことになる。

フトボナガボソウは花序の軸は無毛で太く、果

実が軸に食い込んで作る溝は軸の幅より著しく狭い。ナガボソウは花序の軸や包葉の縁に短毛があり、果実の溝と花序の軸とは殆ど同じ幅である。花は共に濃紫色である。現在の所、日本にはこの2種類しか帰化していないようであるが、初島氏の琉球植物誌のナガボソウの記述には、花の色や葉の鋸歯などに *S. cayennensis* を思わせる部分もあるので、琉球にはほんとの *S. cayennensis* やそれに近縁の *S. dicotoma* も帰化しているかもしれない。これらは花序の軸に多細胞の白色の長毛がやや密にあるので、容易に区別できる。

琉球を含めた熱帯地方のナガボソウの標本を貸して下さった、琉球大学の島袋敬一氏に深謝します。

(東京大学理学部附属植物園)

## アマミイケマについて (山崎 敬)

Takasi YAMAZAKI: On *Cynanchum wilfordii* var. *amamianum* Hatusima

アマミイケマは実物を見る機会がなく、実態がわからなかった。最近この属を纏める必要があり、奄美大島の田畑満大氏から実物を送っていただいたところ、コイケマの変種とされているが、コイケマとは全然別のものであることがわかった。奄美のものは副花冠がよく発達し、その内側に突起が隆起している。この性質はコイケマではなくイケマに見られる性質である。したがってイケマと同じ *Endotropis* 節に属す種類である。イケマの花序はほぼ散形に花が付き、花卉は白色であるが、奄美のものは花序は軸がやや伸びて散房状であり、花卉は淡緑色である。奄美によく似たものは台湾から中国・ヒマラヤに分布する *C. auriculatum* Royle ex Wight である。この中でも台湾のものに似ている。ヒマラヤのものは萼片はほぼ無毛で縁に長毛があるが、中国・日本のものは全体にまばらに短毛がある。また中国のものは副花冠が長楕円状卵形で、薬柱の約2倍の長さがあるが、台湾・日本のものは副花冠は卵形で薬柱の1–1.5倍である。以前、副花冠の形で台湾のものを別種としたが、その後、台湾や中国の標本が

増えてくると、それで両者を別種として区別するのは無理であることがわかってきた。ヒマラヤから日本まで同一種類とするのが妥当であろう。ただこれらには地域ごとに異なる3型が認められる。

ヒマラヤ地方のものは花が大きく、萼片は長さ約3 mm、花冠裂片は長さ6–7 mm、副花冠は卵形で薬柱の約1–1.5倍の長さがある。

中国のものは花が小さく、萼片は長さ約2 mm、花冠裂片は長さ3–5 mm、副花冠は長楕円状卵形で、薬柱の約2倍の長さがある。

台湾・琉球のものは、花の大きさは中国のものと同じであるが、副花冠は卵形で薬柱の1–1.5倍である。

*Cynanchum auriculatum* Royle ex Wight, widely distributed from Himalays to Japan (Is. Amami-ohshima only), is separated into three local forms.

They are differentiated as follows:

A. Sepals ca. 3 mm long; petals 6–7 mm long;